

☆帝国主義の侵略反革命、社会帝国主義の武装反革命を粉碎し、世界革命戦争—世界プロ独を組織する世界単一党を国際階級闘争の最前線に組織せよ！

1980年
7月15日
第331号
編集発行人 高木一夫
一部 150円

烽火

ZOROSH-

共産主義者同盟（全国委員会）

- 大阪戦旗社 大淀区本庄東2丁目2の31
とみやビル15号 Tel (06) 371-3706
- 郵便振替 大阪—6333 高木一夫
- 銀行口座 第一勧銀 515-1058150 高木一夫

社共＝中間連合政府派にかかる

革命的指導部を全戦線に準備せよ



夏から秋への三里塚大攻勢を
全国から開始せよ (写真は5・25集会)

**韓国光州蜂起へ
韓國光州蜂起への
眞の国際連帯の道は何か**

韓国光州蜂起——この勇敢で英雄的な光州人民のたたかいは、全世界の先進的な労働者人民の熱烈な歓声をよびおこした。しかしそれは日米帝にささえられた全闘 軍事独裁によって、五

日間の市街武装占拠ののち無惨にも鎮圧させられた。この韓国五月蜂起よりすでに二ヶ月ちかくの月日が経過しようとしている。光州人民の偉大なたたかいは、南朝鮮人民になにを残し、そ

全国のたたかう労働者人民諸君！

われわれはいま新たな時代の波頭に立っている。世界は、戦後ヤルタ・ジユネーブ体制＝「戦後平和」の一時代の完全な終エンド帝国主義戦争へとかう動乱の一時代のはじまりを告げている。ソ連社会帝国主義のアフガン侵略、米帝国主義のイラン軍事侵攻は、米ソを中心とした市場再分割戦が、侵略反革命戦争として進められようとしている事實を明らかにしている。

日米帝の新植民地主義体制＝軍事独裁政権の危機と南朝鮮人民の光州蜂起。国内的には、慢性的政府危機、ブルジョアジー内部の対立、社共＝中間連合政府派の吸引のもとでの、衆参ダブル選挙＝自民党的安定多数確保。この二つの事態はまったく異なる角度からではあれ、あらゆる自然発生性の抨撲主義者の空文句とは正反対に、前衛党建設によるプロレタリアートの樹立すべき権力の準備が根本からなされなければならない時代の訪れを示している。労働者人民の先頭に立ち、彼らを鼓舞し、全戦線から社会主義革命の準備戦を組織せよ。

**安保＝日韓闘争の前進を！
たたかう朝鮮人民と連帯し**

してわれわれ日本のプロレタリアート人民にてなにを要求したのか。今後の国際・国内階級闘争の前進のために、この点をあきらかにすることは決定的に重大である。

第二、第三の光州蜂起は

さけられない

五月一八日、金大中氏逮捕、全土戒厳令への移行という全斗煥によるクーデターにたいする全南大二百名のデモが、光州蜂起の序幕であった。

つづく五月一九日、ソウルから急派された三千名の空挺部隊が、光州の学生市民のデモに銃剣をふりかざしておいかかった。「かぼちやでもつき刺すように、手当り次第デモ群衆をつき刺した。そして血が川のように流れれる負傷者を車のトラックに投げつけ」(朝鮮大学民主闘争委員会)といいうような残酷のかぎりをつくした蛮行を、彼らははたらいたのである。

光州人民の怒りは頂点に達し、たたかいは全人民的なものとなつた。人は警察や武器庫をおそい、四千丁の銃、ダイナマイト、手りゅう弾で武装した。都心のアスファルトは血でそまり、激しい市街戦がおこなわれた。戒厳軍はいつたん市を中心部からしりぞいた。錦南大路通りは三〇万人の市民に制圧され、さらに光州市のたたかいは全羅南道二六市のうち十六市のデモへと波及した。光州市中心部は武装した市民であふれた。タクシーやバスは供出され、武装した市民学生を満載して市内を走りまわった。光州市はついに、武装した光州市民によつて制圧されたのである。

五月二五日、韓国首相である崔圭夏は、テレビをつうじて光州突入の宣言を発した。学生をはじめとした先進的光州市民は、これと最後までたたかい不退転の決意をあきらかにした。

五月二七日午前二時、戒厳軍は武装へりで特戦団(空挺隊、空輸特別旅団)を道庁前に強行着陸させ、陸からは一個師団が突入、戦車は砲撃し、五〇ミリ機関砲が使用されるといいう本格的な市街戦がおこなわれた。「激戦であった」と戒厳軍の指揮官がのべたようにそれは、きわめて大規模なものであり、光州市民はこれに抗し、圧倒的に弱体な武器を手にしてではあつたが、最後まで英雄的にたたかひぬいた。

この英雄的光州人民のたたかいも、戒厳軍の巨大な軍事力の前に制圧され、いつたんの敗北をよぎなくされざるをえなかつた。多くの勇敢で革命的な学生、維新体制とその残存勢力を心の底から憎んだ熱情あふれる人がははるかに多く、数百数千といわれるが正確にはわからない。

だが第二第三の光州蜂起は、もはやさけることができない。なぜならば光州蜂起は、ブ



ルジョアマスコミがしたり顔でふれまわつてゐるよう、「地域差別」や「百濟、新羅以来の歴史的対立」に、その中心的根柢がある。

今回の光州蜂起は、昨十・二六朴射殺事件

のひき金になつた馬山・釜山の人民決起、そ

して四月以来の東原炭鉱労働者に代表される

韓国労働者の決起、ソウルを中心とした全土

における学生決起という、一連の南朝鮮人民

のたたかいの延長上に存在する。そしてこの

一連の過程そのものが、学生運動の質的発展

の過程であつたし、同様に労働運動において

御用幹部打倒をかかげ、個別企業の権力を突破

して産業別へとその連帯をおしひろげるなど

の成果がかちどられてきた。とりわけ本年に

入つて、二月の卸売り物価が一五・二%と史

上最高の上昇をしめし、本年第一四半期の失

業者数が八二・九万人(前年比四七・五%増)

を記録したことにみられるように、南朝鮮経

済の急速な破壊は、労働者の経済闘争の頻

發と激化の物質的根柢となつた。これらを背

景として、学生と労働者のたたかいは、維新

残存勢力の打倒と民主化を政治的焦点とした

全人民的闘争として、急速に拡大し激化して

きたのである。

だが日米帝にとつて、中東とならんで南朝

鮮における安定した支配の護持は、自己の死

活を左右する問題としてある。彼らのゆい

つの方策は、血なまぐさい独裁政権を擁立し、

人民のどのような初步的決起といえども暴力

的で鎮圧するいがいにはないのである。それ

は逆にいえば、南朝鮮人民のどのように小さ

な決起であろうとも、一挙的に激しい日米帝

の支配にたいする闘争として爆発してゆく条

件を有していくことをしめしている。

今回の光州蜂起は、四・一九革命をうわまわる南朝鮮人民の民族解放のうねりであつた。

そしてこのたたかいは、軍事独裁支配の真の

主人たる日米帝との闘争の不可避性を、大衆

的にあきらかにした。南朝鮮人民のたたかい

が、反帝民族解放闘争としてますます前進を

とげゆくことは、もはやおしとどめること

はできない。

日本帝の新植民地主義支配体制をゆさぶり

ながら前進する、南朝鮮人民のたたかいに連帶する道は、自国の帝国主義と日帝の朝鮮侵略反革命にたいする激しい闘争と、自國帝国主義を打倒しプロレタリアートの権力を樹立してゆく闘争をぬきにしてはありえない。南朝鮮人民のたたかいの前進にとって、日本プロレタリアートのこのたたかいのもつ位置は大きい。わが日本プロレタリアートは帝国主義の朝鮮人民にたいする蹂りんをゆるさず、この打倒にむけてたたかいぬいてゆかねばならない。

朝鮮人民のたたかいの前進にとって、日本プロレタリアートとして、自國帝国主義の朝鮮人民にたいする蹂りんをゆるさず、この打倒にむけてたたかいぬいてゆかねばならない。

日米帝の新植民地主義体制を打倒せよ

今回の光州蜂起は、南朝鮮人民のたたかいが本格的な反帝民族解放闘争へと、巨大な一步をふみだしたことしめした。多くの血が流されたが、つぎの勝利にむけた貴重な教訓が残された。

その第一の教訓は、南朝鮮人民のたたかいが本格的に民族解放・社会主義のたたかいとして前進しなければならないことが、ますます

が、本格的な反帝民族解放闘争へと、巨大な一步をふみだしたことしめした。多くの血が

流されたが、つぎの勝利にむけた貴重な教訓が残された。

米帝は維新体制にたいする口先での批判、

全斗煥にたいする不満のボーズをとりつつ、

みずからが指揮権をにぎる米韓連合司令部か

ら韓国軍を光州にむかわしめ、また空母ミッ

ドウェー、コラルシーなどを韓国近海に派

遣して、全斗煥の思う存分の人民弾圧を保障

した。日帝もまた「韓国民主化について韓国

政府が内外に声明している路線を着実に実行

してゆくことを期待する」として、全斗煥の

軍政への全面支持を与え、「日本進出企業へ

の警備強化」を要求して人民弾圧を要請した。

日帝は南朝鮮人民のたたかいが、日帝の

侵略反革命戦争体制への正面戦へと不可避に

發展せざるをえない質を有していることを、

なによりも恐れており、それが全斗煥による

光州蜂起への残虐さあまりない弾圧としてあ

らわれた、といつてもけつして過言ではない

のである。

そして日帝の支配とたたかいにくくといいうことは、南朝鮮人民のたたかいが民族解放・社会主義へと前進してゆくことには、その真の勝利がありえないこともまた現代過渡期世界の教訓として鮮明である。いまこそこの大道にむけて、帝国主義によつて育成されつづけてきた「反共意識」が突破されるときである。「反共より民主」として開始された今回のたたかいにみられるように、その条件は着実に形成されつつある。

第二の教訓は、民族解放・社会主義へとた



たかいを領導するプロレタリアートの革命党が、南朝鮮人民のたたかいのただなかに断固として組織されなければならないことが、ますます緊要になつてゐることである。

光州人民は「軍の中立」という幻想をうちくだき、戒厳軍が「国民の軍」などではなく独裁権力の私兵でしかないこと、これと武器をもつてたたかいぬくことには、いかなる勝利もありえないことを身をもつてしめた。彼らはきわめて勇敢であった。彼らは「市民軍」「特別防衛隊」「決死隊」などを編成し、戒厳軍との真正面から市衛戦を組織した。だが二一日に戒厳軍を郊外に追いだし以降、「事態收拾委」と先進的部分との分裂が開始されたようだ。いかなる政府権力を樹立するのかという点について、鮮明にすることができたわけではなかった。この限界の突破といふ新たな課題は、南朝鮮プロレタリアートの政治的成熟によつて解決されてゆくであろう。なぜなら日帝の新植民地主義支配との正面戦に勝利するためには、小ブルジョア民族主義、改良主義を基盤とすることはできないからである。革命的プロレタリアートを主力とする社会主義をめざす革命運動としたたかいぬかれてはじめて、その勝利の道はきりひらかれる。

光州蜂起をもつて開始された南朝鮮の新たな政治的流動のなかで、そして英雄的にくりかえされるであろう人民の決起のなかで、このたたかいを社会主義革命にむけた闘争の経験と教訓として蓄積し、もつてプロレタリアート人民を教育、指導してゆく革命党の建設が、南朝鮮人民にとっていまこそつとも緊要の課題となつてゐるのである。輝やかしいたたかいの歴史を有する南朝鮮人民は、いかなる困難があろうともこのたたかいに大胆に歩をふみだしてゆくであろう。

南朝鮮人民の英雄的な決起に、わが日本プロレタリアート人民はいかにこたえるべきか。すでにみてきたように、南朝鮮人民のたたか

くをもつてたたかいぬくことには、いかなる勝利もありえないことを身をもつてしめた。彼らはきわめて勇敢であった。彼らは「市民軍」「特別防衛隊」「決死隊」などを編成し、戒厳軍との真正面から市衛戦を組織した。だが二一日に戒厳軍を郊外に追いだし以降、「事態收拾委」と先進的部分との分裂が開始されたようだ。いかなる政府権力を樹立するのかという点について、鮮明にすることができたわけではなかった。この限界の突破といふ新たな課題は、南朝鮮プロレタリアートの政治的成熟によつて解決されてゆくであろう。なぜなら日帝の新植民地主義支配との正面戦に勝利するためには、小ブルジョア民族主義、改良主義を基盤とすることはできないからである。革命的プロレタリアートを主力とする社会主義をめざす革命運動としたたかいぬかれてはじめて、その勝利の道はきりひらかれる。

光州蜂起をもつて開始された南朝鮮の新たな政治的流動のなかで、そして英雄的にくりかえされるであろう人民の決起のなかで、このたたかいを社会主義革命にむけた闘争の経験と教訓として蓄積し、もつてプロレタリアート人民を教育、指導してゆく革命党の建設が、南朝鮮人民にとっていまこそつとも緊要の課題となつてゐるのである。輝やかしいたたかいの歴史を有する南朝鮮人民は、いかなる困難があろうともこのたたかいに大胆に歩をふみだしてゆくであろう。

戦争策動を強めた ベネチアサミット

には「民主化闘争」という段階にありながら、本質的には日帝との正面戦といふ闘争の質を先行的に内包している。これに最大限の連帯を組織することが必要なのである。

たとえばわが国の社会帝国主義日共は、「日本を第二の韓国にするな」として、南朝鮮人民の決起にたいするゆるしがたい敵対をおこなっている。彼らは「軍事ファシズム政権の蛮行糾弾」と口にしたが、それは日帝の南朝鮮にたいする支配を否定し、これにたいする南朝鮮人民のたたかいに日本プロレタリアート人民が、自國帝国主義日帝打倒をもつて連帶してゆく任務を否定するためのエスローガンである。このような立場は、帝國主義を免罪する排外主義である。

われわれは眞の国際連帯の闘争を組織するために、つぎのように主張する。

帝国主義本国プロレタリアートとして、日米帝の新植民地主義支配との闘争を、南朝鮮人民の肩にのみ負わせないこと、侵略反革命の戦争にうつてでんとする自國帝国主義の敗北をめざすこと、これらは第一義的になんとしても実現すべき責務である。さらに先進的プロレタリアートはこれにとどまらず、南朝鮮人民との国際主義的團結を断固としておしすめなければならない。もちろんのことそれは、南朝鮮人民と日本プロレタリアート人民との團結にとどまらず、アジアにおける民族解放・社会主義勢力のたたかいの團結の内実として、実現されなければならない。それは、こんにちの中国ベトナム戦争にしめされた国際階級闘争の前進課題を、單一の世界党と世界プロ独の建設を統合軸とした、国際党派闘争を媒介にして突破してゆく事業と一体のものとして、おしすすめられてゆくであろう。

かかる帝・社帝の危機の激化にもとづく、戦争準備の世界的展開は、他方でアジア・アフリカ・ラテンアメリカ諸国における反帝反社帝の人民のたたかいを誘発し、反帝民族解放闘争、民族解放・社会主義の国際的前進をよびおかさずにはおかないのである。韓国光州蜂起もまた、このような国際階級闘争の連鎖の一環に位置づけられるものである。

全世界の民族解放闘争のひきつづく前進、とりわけ自己のアジア侵略反革命の生命線たる韓国での五月蜂起といふ事態は、日帝ブルジョアジーに大きな恐怖をあたえた。日帝は日米安保を強化し、このかんカーターの世界戦略と結合して、沖縄の海兵隊のイラン人質奪回作戦への派遣協力、ペルシャ湾・韓国近海への在日米軍の展開にたいする加担と協力、米海軍と自衛隊との共同作戦などの一連の反革命軍事行動をおしすすめてきた。そしてまた激烈な帝国主義間強盗的抗争のなかで、日帝独自のアジア大平圏を射程に入れた侵略反革命構想の野望をたくましくしてゐる。資源問題、市場問題の帝国主義的解決のために日帝は、アジア太平洋地域ASEAN諸国、南朝鮮、中国をはじめ、オーストラリア、ニュージーランド、メキシコをふくむ地域を經濟的政治的にプロック化し、その政治的軍事的盟主として登場せんとしているのである。日帝は一方において、帝・社帝諸列強との強盗的抗争にしのぎをけずりながら、同時にアジア・アラブ・太平洋圏における民族解放闘争の圧殺に焦点をあわせ、いのちがけの飛躍をなさんとしているのだ。

さる六月二二日から開催された帝国主義首脳会談ベネチアサミットは、東京サミットにひきつづいて「エネルギー問題、インフレ問題、南北問題、貿易通貨問題」を議題にすれるとともに、「ソ連のアフガン侵攻、国際テロリズム特に大使館人質事件、軍縮、中東和平工作」などの政治問題を、大々的に正式議題としてうちだした。米帝カーターは

ベネチアサミット出席にあたり、「世界の先進民主諸国はソ連によつて試練にさらされている。われわれはソ連のアフガニスタン侵攻にたいする国際的反対を維持し、アフガニスタン侵略からソ連が恒久的利益を得ることをさまたげなければならない」とのべ、対ソ対決の強硬姿勢をうちだした。

これまでのサミットと同様、ベネチアサミットもまた、通貨通商をめぐる日帝の対立と抗争、アフガン、イラン、中東和平問題をめぐる米帝とEC諸帝の対立と抗争、そして強盗的取り引きの場であつたとともに、米帝カーター・ドクトリンを中心とした米帝をはじめとする帝国主義諸列強の、侵略反革命体制の強化の野望を、これまで以上に露骨にあからさまにした会談であった。そしてそれは七月、大平国葬に名を借りての日米会談、米中会談、日韓・米韓会談へとひきつがれたのである。

かかる帝・社帝の危機の激化にもとづく、戦争準備の世界的展開は、他方でアジア・アフリカ・ラテンアメリカ諸国における反帝反社帝の人民のたたかいを誘発し、反帝民族解放闘争、民族解放・社会主義の国際的前進をよびおかさずにはおかないのである。韓国光州蜂起もまた、このような国際階級闘争の連鎖の一環に位置づけられるものである。

全世界の民族解放闘争のひきつづく前進、とりわけ自己のアジア侵略反革命の生命線たる韓国での五月蜂起といふ事態は、日帝ブルジョアジーに大きな恐怖をあたえた。日帝は日米安保を強化し、このかんカーターの世界戦略と結合して、沖縄の海兵隊のイラン人質奪回作戦への派遣協力、ペルシャ湾・韓国近海への在日米軍の展開にたいする加担と協力、米海軍と自衛隊との共同作戦などの一連の反革命軍事行動をおしすすめてきた。そしてまた激烈な帝国主義間強盗的抗争のなかで、日帝独自のアジア大平圏を射程に入れた侵略反革命構想の野望をたくましくしてゐる。資源問題、市場問題の帝国主義的解決のために日帝は、アジア太平洋地域ASEAN諸国、南朝鮮、中国をはじめ、オーストラリア、ニュージーランド、メキシコをふくむ地域を經濟的政治的にプロック化し、その政治的軍事的盟主として登場せんとしているのである。日帝は一方において、帝・社帝諸列強との強盗的抗争にしのぎをけずりながら、同時にアジア・アラブ・太平洋圏における民族解放闘争の圧殺に焦点をあわせ、いのちがけの飛躍をなさんとしているのだ。

リムバック(環太平洋合同軍事演習)は、日米防衛協力指針(ガイドライン)にもとづくものであつたと同時に、太平洋地域における多様な資源海上輸送ルート確保のための合同軍事演習であった。また最近の「戦後第二の再軍備時代の到来」としてマスクミによつて宣伝されているブルジョアジーの「微兵制

発言」、「自主防衛論」、「武器輸出論」もまた、日帝の深刻な危機感の表明であるとともに、彼らの危機突破の戦略的方針をしめすものにはならない。財界主導の防衛論議はその後、大外相の「独自の自立した外交をするには自主防衛が必要」という軍事外交宣言に發展し、またいつぐ日米会談をおした世界的規模での日帝の反革命としての登場宣言として帰結している。

かかる日帝の危機突破の野望は、「総合安全保障」のヴェールをまとめて具體化されようとしている。

経済同友会は本年初頭、「総合安全保障の確立が緊要である。その一環としての防衛問題についても国民的合意を形成すべきだ」と表明するとともに、首相のリーダーシップの強化、小選挙区制の導入などをかけた。さらにその背後で、憲法改悪が準備されている。「自主防衛の確立」の名のもとに、いよいよ憲法九条と基本的人権、天皇の地位を規定した諸条項に手がつけられようとしているのである。ブルジョアジーいうところの「総合安保」とは、軍備増強とならんで「国内社会の政治不安の解消、間接侵略の阻止」がうたわれていてことみられるように、侵略反革命戦争遂行の国民総動員体制を構築するために国内階級闘争を鎮静化させ、人民を排外主義的に統合せんとする体系的攻撃である。

慢性的の政府危機と衆参ダブル選挙

八〇年代冒頭の衆参両院選挙は、自民党的伸長、社公民ブロックと日共の後退をもつて終った。

この結果はもちろん、自民党単独政権体制たる五年体制の再確立や、逆もどりを意味するものではない。いかなる意味においても「高度経済成長」を背景にした、ブルジョアジーとプロレタリアートの議会における取り引き体制は、その条件をうしなつていてある。商業新聞が「高投票率の浮動票が保守に流れた」と表層をなぞつていてこの本質は、自民党による必死の排外主義宣伝の一連の浸透と、他方における自民党とさして大差のない野党の連合政権構想にたいする、人民の不信の表明の結果としてとらえられるものである。

選挙戦をつうじて日帝ブルジョアジーは、からひきちぎつて、ブルジョアジーから拍手をもってむかえられた。また民社党は、あからさまに自民党との即時の連合を呼びかけ、社公民ブロックのいきつく先をこのうえなくあきらかにした。日共はこれらの動向にたいして、批判的ポーズをとつて登場した。だがその「批判」の内実は、「社公民共闘からの日共の排除」にむけられており、それにたいして日共は「主権、国土の防衛という点ではわれわれは愛國者である」と、排外主義、ブルジョア民族主義を全面開花させ、ブルジョアジー、小ブルジョアジーに自己の「安全性」を誓約しているのだ。社公民ブロックにたいする労働者人民の反発を集票せんとした日共もまた、日本帝国主義の危機にたいする内気な救済者にすぎない。総じて社公民であれ日共であれ、日本帝国主義の危機の救済策を同じ土俵で争つたのである。

そしてまたこの土俵づくりこそ、ブルジョアジーの大きなねらいであった。選挙前の「自由経済と民主主義の枠組みが守られ、防衛問題について歩みよりがみられれば、保守官僚機構の強化肥大化としてつくりあげ、他方では産軍複合体の強化を軸にしたブルジョア政治委員会の再編、「中道勢力」の育成、そして労働運動にたいする産業報国会化攻撃という、きわめて政治的な攻撃をもつてつくりだそうとしている。

選挙を前にしてブルジョアジーは、経団連の会長に稻山（新日鉄）を任命し、「政治と行政にたいする財界の復権」をぶちあげた。そして自民党的党内抗争に介入し、「分裂選挙の回避」を指令し、「貴重な勝利」を獲得した。しかし彼らとてもこれが安定的にづくなど思つてゐるわけではない。確かにそうち。日帝の体制的危機は修復することはできず、労働者人民への犠牲の強要によつて延命しうるにすぎない。日帝の危機は局面的なものではなく、国際階級闘争と国内階級闘争に挾撃された結果の構造的なものである。しかもそれは「上層がこれまでどおりやつていけなくなり、下層もこれまでどおりやつていけなくなる」一時代へとさしかかるうとしているのだ。

選挙終了直後、ブルジョアジーは予想外の勝利を前にして「いまこそ国家百年の基本政策を実現すべきだ」として、一大攻勢宣言を発した。「最後の機会」を利用して、迫りくる階級的激動にたいしてもビクともしない階級支配の枠組みをつくりあげること——

自民党的再編をおこない、社公民を筆頭とした「健全野党」を育成するなど、政治勢力の砲となるであろうし、またそらしなければならない。

強まる戦争とファシズムの嵐

中間連合政府攻撃の新たな局面のなかで、われわれは日帝ブルジョアジーの「最後の好機」をとらえた戦争とファシズム準備の突撃にたいし、正面対決し、社共・右翼日和見主義との全面的闘争を、労働者人民の全線戦の末端にまでもちこまねばならない。すでに社公民ブロックとそれに連動する労戦統一が、日本資本主義の危機を救済せんとするものであること、それを労働者人民の血をもつて購おうとするものであることは明白である。

日共もまたブルジョアジーの攻撃の前に、小ブルの利益を対置することによつてそれに合流してゆくものである。今回の総選挙において彼らは「三つのノー、一つの選択」、すなわち「世界の霸權主義、自民党政治、社公民路線」に反対し、「革新三目標（①安保破棄、非同盟中立②大企業本位の政治から国民本位の政治への転換③軍国主義復活反対）」にもとづく国政革新を実現するといふ政策を打ちだした。これをつらぬく立場は社会愛国主義である。彼らはいふ。「ソ連の脅威があるのなら安保があつたほうが安全じゃないか」という気分がふえていてことについたしてわが党は、安保条約はこんなに悪いものだという宣伝は必要だが、さらに共産党は眞に愛国的な党であり、いかなる国の侵略にたいしても国民の先頭にたつてたたかう党だ、といふことを訴えてゆくことが必要です」と。どちらのとおりこには、現在の日本の国家権力をにぎつてゐるのがブルジョアジーであること、準備されてゐる戦争が帝国主義戦争であることなど、問題にされていないのである。選挙での後退は、ますます日共をして小ブルの利害の防衛者へとかりたて、日帝の中間連合政府攻撃のもとに人民を屈服させてゆく導水路にしてゆくのだ。

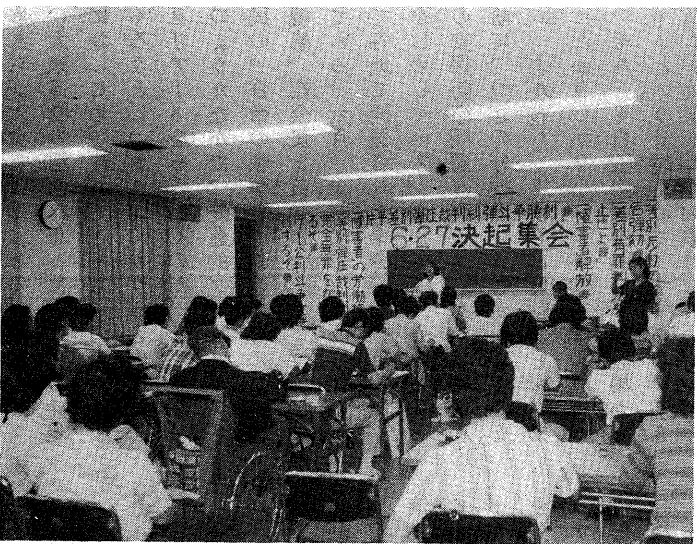
また他方、かかる日共と同一土俵にあつて労働者は、反霸権をかかげてソ連社帝、日共と共に投票せよ」と主張した。そして「政党間の組合せから独立した、自らの実力に依拠した大衆運動をかちとれ」と訴えた。だが問題なのは、かかる大衆運動が社共とどのようにならとをわかつ、何をめざして進んでゆくの

宣伝しようと呼びかけた。

帝国主義の強盗的抗争の激化のなかで日米帝の侵略反革命戦争策動は、激化している。光州蜂起にしめされる南朝鮮人民のたたかいは、このような日米帝の侵略反革命戦争策動にたいす

るたたかいである。このたたかいによって、日米帝の新植民地主義支配は、侵略反革命の最前線を形成する朝鮮半島において、ガタガタにゆすぶられている。そうであるがゆえに、日米帝は、カイライたる全斗煥を使って、どんなささわれわれは支援する会とともに、いまこそ全力あげてたたかいねかねばならない。

七月一日の結審公判を終え、片平公判はいよいよ判決をむかえようとしている。大阪地裁・野間は、判決公判日を九月一八日と指定した。残すところあと二ヶ月。「障害者」の労働権をめぐる闘争であるこの片平闘争の完全勝利と、被告二名の完全無罪のどちらか、われわれは支援する会とともに、いまこそ、日本プロレタリアートは、日米帝の侵略反革命戦争と



完全無罪の獲得をちかう
集会参加者 (6.27 大阪)

差別有罪判決を阻止せよ

5年ぶりの決起集会 6.27

片平闘争

へ六・二七集会

七月一日の結審公判を前にして、支那の六月二七日、支援する会主催で片平闘争決起集会が大阪・部落解放センターでおこなわれた。五年ぶりに開催された片平集会には、関西の各地よりたたかう「障害者」、労働者学生、約百名が結集した。関西における「障害者」解放闘争の代表的なたたかいとして存在しつづける片平闘争は、じつに七年におよぶ試練に耐えぬきながら、依然としてしっかりと大衆的基本と支持にささえられていること

冒頭提起された集会基調は、片平闘争七時間をおきかえり、つぎのようにその意義をあきらかにした。 「片平闘争は、まず養護学校における片平氏といふ『障害者』

の差別解雇に端を発し、それが全社会的なひろがりをもつ闘争としてたたかいために、『障害者』をめぐるあらゆる生活上の諸問題と、「障害者」解放をめぐる核心的課題を提起しつづけたことは、まぎれもない事実である。とりわけまず第一に片平闘争がその最初の段階から、「障害者」の労働権の奪還をめぐる闘争として、自己をつきだしてきたことが、なによりもふまえられなければならない」「片平闘争の先進性は「障害者」の糾弾闘争を大胆に突出させ、あらゆる改良主義者が「障害者」じしんを主体とした

自主的運動と、糾弾闘争のなかで、その階級的意識を成長させた労働者階級との階級的結合によって、前進してゆくことを萌芽的にしましたことにある」

基調提起につづく連帶アピールのかずかずは、この基調をいわば実証するかたちでおこなわれていった。全部で十三団体個人よりアピールが寄せられた。まず、大阪市従、市職両青年部のあいさつにつづき、部落解放同盟奈良県連青年部、同大阪府連矢田支部、大阪府立高校保安警備員労働組合から発言があり、そして大阪市教組の大同協、市同協（同和教育研究協議会）の三つの集会であつてメセセジをはさんで、大阪市教組事務職員部、大阪府職労不当処分を考える会のそれぞれの代表が、なぜ片

の差別解雇に端を発し、それが全社會的なひろがりをもつ闘争としてたたかいために、『障害者』をめぐるあらゆる生活上の諸問題と、「障害者」解放をめぐる核心的課題を提起しつづけたことは、まぎれもない事実である。とりわけまず第一に片平闘争がその最初の段階から、「障害者」の労働権の奪還をめぐる闘争として、自己をつきだしてきたことが、なによりもふまえられなければならない」「片平闘争の先進性は「障害者」の糾弾闘争を大胆に突出させ、あらゆる改良主義者が「障害者」じしんを主体とした自主的運動と、糾弾闘争のなかで、その階級的意識を成長させた労働者階級との階級的結合によって、前進してゆくことを萌芽的にしましたことにある」

大阪地裁にもちこんで、七月一日には午前午後をつらぬいて結審公判闘争がたたかいために、一号大法廷を傍聴人が埋めつくすなか、弁護人、被告によつて最終意見陳述が堂々と展開された。なおこの公判廷において、検察は被告M氏にたいして、微役四ヶ月なる不当きわまりない求刑をおこなつた。

判決まじかである。差別有罪判決策動、被告両氏への失職・再解雇策動と対決し、総力あげて九・一八闘争（地裁・十時）へ！

No.3 近日発売予定

500円

片平闘争資料集

No.2 発売中！

片平闘争

行委展開をもつてかちとられた。

三里塚農民の苦闘を描き出した映画上映と白升反対同盟・小川清之氏から寄せられたアピールをもつて集会ははじまつた。さらに、たたかう「障害者」・片平氏、結集した労働者の代表、などの連帯の表明が続き、それにこたえて、各大学の闘争報告に移つてゆく。

京都産業大学の学生は、当局ー学生大衆の排外主義への廻い込み

暫定開港より二年を迎えた五月二十五日、三里塚全国総決起集会が八六五五名の大結集をもつて開催された。

『二期工事の条件整備』と銘うつた農振策、千代田農協移転攻撃は、今春のたたかいによつてみごとに粉碎された。「土地と水」の改良の幻想でもつて条件派を育成し、三里塚闘争を中間連合政府攻撃のもとに解体せんとする野望は打ち破られた。

それだけではない。厳しい試練はたたかいを打ちきたえ

る。日帝ー公団は今こそこのことを思い知らねばならない。反撃戦のなかから青年行動隊を中心とした若々しい力が反対同盟の先頭に立ち、三里塚第一公園は新たなたたかいの気運に包まれた。時あたかも、海をへだてた南朝鮮では、全斗煥の残虐な弾圧をはねのけ、死をも恐れぬ光州蜂起がたたかひぬかれていた。光州蜂起に連帶し、二期工事阻止ー軍事空港完全粉碎へ突き進んでいる。

から八一年着工にむけた攻撃が、ぶしは、昨年十二月、和歌山市本年に入つて急ピッチで進行し、議会、本年三月二十五日大阪府議会(決議撤回→要望決議)と、議会(決議撤回→要望決議)と、さいたま市議会(決議撤回→要望決議)と、ふくめると五兆から七兆円といふ新空港計画資金をエサにして、

関西新空港粉碎・闘議決定阻止せよ！

右翼の一体となつた御用自治会化

攻撃ー政治的諸権利のハク奪の攻

撃が、関西財界の要請にもとづい

た「西の筑波」の先取り実質化で

あること、これとのたたかいを責

任をもつて担い抜いていくという

と日共ー学生自治会執行部による

命館大学の学生からは、大学当局

暫定開港より二年を迎えた五月

始前からかつてない熱気に満ちて

いた。

十二時三〇分、「朴なき維新体

制下で韓国労働者人民の決起が続

いている中で本日の集会の意義は

力強く訴え、六・二五全国代表者

第三に秋、政府に二期工事の断念

をたたかう住民団体、日本原

争をたたかう農業の深下・実現

北富士、大城昌夫氏、砂川基地反

抗同盟、パイプライン埋設阻止共

をつくりだし、廢港にむけた方針

をうちだそう」という司会の呼び

かけによつて集会は開始された。

からラジオ放送をもつてしめくく

障連、柏原原発反対同

・一三上京団とともにたたかおう。それを全国的に進めるために反対四項目実現、百万人署名貫徹」と

同盟が全国交流活動にうつて出る。

力強く訴え、六・二五全国代表者

第三に秋、政府に二期工事の断念

をたたかう農業の深下・実現

北富士、大城昌夫氏、砂川基地反

争をたたかう農業の深下・実現

北富士、大城昌夫氏、砂川基地反

期二期あわせて一兆四千三百億円、発着回数一日七百四十回。安保条約第八条、および地位協定によつて「日米安全保障のため」なら軍事目的に使用しうる（ちなみに大阪空港は四百八十回）貨物基地をもつ二十四時間使用の、文字どおり日本最大の巨大空港である。日帝は、この関西新空港の建設を、四空整（第四次空港整備六ヶ年計画）のなかで、三里塚二期工事とならぶ計画の中心に与えてきた。

日帝がこのようないまほろびた巨大プロジェクトをおこなわんとするのは、このかんの帝国主義の強盗的抗争の激化のなかで、ゆいづの延命の道たる侵略反革命戦争準備のためである。

周知のように、日本の空港は、ヨアジ一の危機の救済とプロレタリアート人民の搾取・収奪のためされた、朝鮮アジア人民の英雄的決起は、日米帝の朝鮮侵略反革命策動をいよいよもつて激化させている。関西新空港は、萬博の例をみるとまもなく、諸物の投資に、ブルジョアジーは、されんとしているのだ。

日帝のいまひとつのねらいは、へと、労働者人民のたたかいを「不況対策」「関西地盤のかさあげ」などを名目にした巨大な公共投資をもつてするブルジ

タリアート人民の搾取・収奪のためのごとくむらがつてている。巨額の国債の発行に支えられたこと規定されている。光州蜂起にしめされた、朝鮮アジア人民の英雄的決起は、日米帝の朝鮮侵略反革命策動をいよいよもつて激化させている。関西新空港は、萬博の例をみるとまもなく、諸物の投資に、ブルジョアジーは、されんとしているのだ。

日帝のいまひとつのねらいは、へと、労働者人民のたたかいを「不況対策」「関西地盤のかさあげ」などを名目にした巨大な公共投資をもつてするブルジ

タリアート人民の搾取・収奪のためのごとくむらがつてている。巨額の国債の発行に支えられたこと規定されている。光州蜂起にしめされた、朝鮮アジア人民の英雄的決起は、日米帝の朝鮮侵略反革命策動をいよいよもつて激化させている。関西新空港は、萬博の例をみるとまもなく、諸物の投資に、ブルジョアジーは、されんとしているのだ。

日帝のいまひとつのねらいは、へと、労働者人民のたたかいを「不況対策」「関西地盤のかさあげ」などを名目にした巨大な公共投資をもつてするブルジ

タリアート人民の搾取・収奪のためのごとくむらがつてている。巨額の国債の発行に支えられたこと規定されている。光州蜂起にしめされた、朝鮮アジア人民の英雄的決起は、日米帝の朝鮮侵略反革命策動をいよいよもつて激化させている。関西新空港は、萬博の例をみるとまもなく、諸物の投資に、ブルジョアジーは、されんとしているのだ。

日帝のいまひとつのねらいは、へと、労働者人民のたたかいを「不況対策」「関西地盤のかさあげ」などを名目にした巨大な公共投資をもつてするブルジ

タリアート人民の搾取・収奪のためのごとくむらがつてている。巨額の国債の発行に支えられたこと規定されている。光州蜂起にしめされた、朝鮮アジア人民の英雄的決起は、日米帝の朝鮮侵略反革命策動をいよいよもつて激化させている。関西新空港は、萬博の例をみるとまもなく、諸物の投資に、ブルジョアジーは、されんとしているのだ。

日帝のいまひとつのねらいは、へと、労働者人民のたたかいを「不況対策」「関西地盤のかさあげ」などを名目にした巨大な公共投資をもつてするブルジ

タリアート人民の搾取・収奪のためのごとくむらがつてている。巨額の国債の発行に支えられたこと規定されている。光州蜂起にしめされた、朝鮮アジア人民の英雄的決起は、日米帝の朝鮮侵略反革命策動をいよいよもつて激化させている。関西新空港は、萬博の例をみるとまもなく、諸物の投資に、ブルジョアジーは、されんとしているのだ。

R G 戦士への報復判決弾劾し 非合法党建設の前進かちとれ

共産主義者同盟(全国委)
R G 公判闘争被告団

全国の同志・友人諸君。

六月二七日、大阪地裁は「RG被告団」全員に有罪判決攻撃をしかけてきた。「被告人らの思想、信条、政治的立場は別として、その犯行は憎むべきものである」という使いふれたペテン的言辞を弄して敵国家権力は、十年におよぶRG公判がつきつけた日本プロレタリアートの戦闘宣言に、まさしく階級的回答をうちおろしたのである。

判決の階級的性格は、まさに現実の階級攻防のなかでとらえづくされ、反撃されねばならない。そして七〇年代暮明けにさいしてになわれた「RG闘争」は、武装蜂起→プロレタリア独裁を組織する前衛党建設のための戦闘宣言として、こんにちに継承されねばならない。これが十年におよぶ「RG公判闘争」に關するプロレタリアートの総括の立場であり、たたかいの継続と發展を期してふみかたためるべきプロレタリアートの立場である。

判決の階級的性格は、まさに現実の階級攻防のなかでとらえづくされ、反撃されねばならない。そして七〇年代暮明けにさいしてになわれた「RG闘争」は、武装蜂起→プロレタリア独裁を組織する前衛党建設のための戦闘宣言として、こんにちに継承されねばならない。これが十年におよぶ「RG公判闘争」に關するプロレタリアートの総括の立場であり、たたかいの継続と發展を期してふみかたためるべきプロレタリアートの立場である。

大阪地裁の有罪判決に 反撃を開始せよ

RG建設の意義と 継承上の立場

国家権力は、一九六九年の強制収奪闘争、対電電公社反レッドページ闘争、七〇年の対赤軍派党派闘争、山田弾薬庫輸送列車阻止闘争、七一年の東京警察機構爆破闘争のすべてに關して「有罪」であるとし（山田弾薬庫輸送列車阻止闘争のうち神戸地区における闘争のみ立証不能で無罪）、齊藤君に懲役八年の実刑報復をはじめ、大森征也君に懲役三年、久留島君三年、中塚君三年、大森進君二年六ヶ月、大塚君一年六ヶ月、浜田君一年六ヶ月、官崎君一年、それぞれ執行猶予四年から二年という「判決」を宣告した。

それは、米帝のベトナム侵略反革命戦争と日帝のそれへの加担を粉碎し、ベトナム民族解放・社会主義革命に連帶してゆくたたかいであり、また戦後最大の階級闘争の激化、労

働者大衆の武装決起にたいしぶりかざされた資本・国家権力の残酷な弾圧への、真正面からの反撃戦でもあった。そしてそれはなによりも、合法主義・戦闘團主義と決別し、革命の軍事を組織しうる中央集権非合法党建設のための、革命的プロレタリアートの長大な苦闘の第一歩のためのたたかいであつたことが忘れられてはならない。

この点に関し、ブルジョア政治商人II永井一味に加担し、党建設と階級闘争のいっさいから逃亡した者は論外であるにしても、もつとも献身的に階級的任務をなつてきた被告團戦士の「総括的見地」のなかにさえ、つぎの二つに結論づけられる誤った方向が存在している。

一つは、わが国におけるレーニン主義前衛闘争の逢着した大衆的武装闘争と国家権力への正面戦を領導すべく、労働者地区軍団と「党的軍隊」RGを組織した。電通反レッドページ武装闘争、山田弾薬庫輸送列車阻止闘争、強制収奪闘争、そして電通マッセンストなど、一連の政治的決起の前衛が彼らによつてになられた。

二つは、わが国における前衛党建設戦の長大な実践の権の行使」にのみ限定しようとする方向である。われわれはこのようないまいさも残さず、前衛党建設の実践であるといふ。レーニン主義からの「一步後退」は、かならずレーニン主義のたてま

え化に再後退し、やがて右翼日和見主義、経済主義者の眞の解党主義に屈服することにつながるからである。

第二には赤報派の諸君の見地である。彼らは逆に一見、RGの建設とそのたたかいの総括を、ただ一点、党の建設に集中させたかのように主張する。しかし彼らの総括は、六〇年代末、共産主義者同盟とプロレタリアートの革命的決起の総体ではなく、その一部、その一侧面のみしか見ようとしている眞の意味でのサークル主義的誤りにつらぬかれており、さらに彼ら自身の党の実際上の路線的無意味さと、実践的破産を救済することにRGの建設とそのたたかいを利用するという、二重の誤りにみちたものである。

赤報派のこの誤りは、たんにRGの総括に関する誤りにとどまるものではなく、彼らの根本的な党的性格そのものの誤りに完全に帰結せざるをえないものである。なぜなら、彼らの党建設の総路線を端的にしめす「PB（政治局）＝YB（軍事委員会）、RG＝政治軍隊＝基本組織」なる規定は、十二・一八路線が六〇年代末党建設の総括をかけて内包した党内分派闘争からの脱落の合理化であり、RG隊員からする、すなわち下からの指導部批判への拝跪を、そのまま路線化したものだからである。

赤報派とわれわれの 基本的対立点

赤報派はいう。「共産主義者同盟は軍事組織を建設し、軍事を指導しうるような非合法党をどのように建設するかをめぐって分裂した」（赤報二八号）と。まさにこのように第二次ブンドの分裂を総括づけねばならない。

この点で赤報派は、ブンドを潜称する右翼日和見主義者、経済主義者とはつきり区別されねばならない。しかし彼らは、この共有しいうる総括の立場を、要旨つぎのように自己のサーカル的撞着にまで帰着させる。RG総括に関する彼らの論旨は、実際上の非合法党建設と革命の軍事組織建設からの逃亡を浮きぼりにしている。

彼らは主張する。「（第二次ブンド）の諸派は……武装闘争を大衆を闘争に立ちあがらせ、大衆闘争を武装闘争に転化させる手段として位置づけ」「党はこの戦略戦術で一致し、政治闘争を革命的に闘うための手段である」ということを立脚点にした。「九回大会決定は……革命的戦術ということをRGによる武装闘争に変えたものであつた」「しかし一旦結成されたRGは、このような政治思想もとづいて指導することはできず……戦争の目的、革命の目的を明らかにすることを党に要求した……（これは）マルクスの資本主義批判の復権によって一応の結着がつけられ……（だが今度は）基本組織とRGとの関係をど

た」「我々は烽火一派の『基本組織』の発展にRGの戦闘を従属させる考え方……に対し、八路線のあいまいな点が組織問題にあること、権主義の組織思想を復権し、PB＝YB、RG＝政治軍隊を中心とした国際非合法党建設への第一歩を踏みだすことができた」（以上赤報二八号）と。

そしてつぎのように自己を弁護するのである。「スターイン主義成立以降、レーニン主義的中央委員会と、それに結合した地方委、下級委の有機的活動の経験は、これまでありようがなかつた。そうした党活動は、PB＝YB、RG＝政治軍隊を中心として、政治的煽動を基本的内容とすることへの転換として、やつとはじめられようとしている」（赤報三二号）と。

「軍事組織を建設し、軍事を指導しうるような非合法党」を建設せんとし、RGを繼承せんとするわれわれは、他の領域はさておくにしても、すくなくともレーニン主義党の軍事に関してもつづきの諸点を見すごしにすることはできない。

赤報派はなぜ、第二次ブンドが逢着した「軍事を組織しうる党的領導」という、レーニン主義的実践をあとかたもなく消しさらうとするのか。彼らはなぜ、武装蜂起を組織する非法党建設戦の第一步として総括すべき六〇年代末の武装闘争から、党のもとに組織された「労働者地区軍団」を忘れさろうとするのか。

そこには第二次ブンドにたいする「戦略戦術の党批判」と「ソビエト主義批判」という共有しうる総括の一部の正しさは、たしかに存在している。だがしかし、「党の武装蜂起」のための六〇年代武装闘争総括の決定的蜂起を過渡期世界止揚のための國際党闘争と結合する今日的実践から、ほぼ完全に逃避する彼らの「世界革命戦争」なる路線ならざる思弁の立場ゆえに、前述したような帰結をもたらしているといわざるをえない。

彼らのこの立場の袋小路は、RGを継承したと称する「軍事を組織する党」の路線を、さらに決定的な誤りをおちいらせる。

彼らは「党の蜂起」を主張する。賛成であ

る。そして党の蜂起とは、階級のもつとも先進的な部分を、ソビエトと赤軍に組織しきるための前衛党の実践、樹立した自國のプロレタリア権力を過渡期世界止揚のために国際階級闘争に結合するプロレタリア独裁の前衛党による領導、すなわち、党によるプロレタリア武装蜂起とプロレタリア独裁の組織化いがいのなにものにも置きかえることはできない。

それがレーニン主義による革命の軍事の根幹

のように関連づけるかという問題に直面した

た」「我々は烽火一派の『基本組織』の発展にRGの戦闘を従属させる考え方……に対し、八路線のあいまいな点が組織問題にあること、権主義の組織思想を復権し、PB＝YB、RG＝政治軍隊を中心とした国際非合法党建設への第一歩を踏みだすことができた」（以上赤報二八号）と。

そしてつぎのように自己を弁護するのである。

彼らがいうように十二・一八路線は、組織路線にその弱点を帰結させたといえる。しか

しそれは、十二・一八路線の党・階級組織論、

前衛党論における根本的敗北を意味していたのであって、これを総括せず、PB＝YBといおうと、RG＝政治軍隊といおうと、レーニン主義中央集権非合法党路線――その根幹をもつて、中央集権非合法党として自己の建設路線を確立することができるのである。

彼らがいうように十二・一八路線は、組織